# 十二

『月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは日々旅にして、旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ春立つる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心くるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り杉風が別墅にうつる。



草の戸も
住替る代ぞ
雛の家。

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として月は有明にて、光をさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢またいつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乘りて送る。千住といふところにて船をあがれば前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゝぐ。

行春や
鳥は啼き魚の
目は泪。

是を矢立の初めとして行道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆる迄はと見送るなるべし、今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひ立ちて吳天に白髮のうら

ふを重ぬといひ、とも耳にふれてまだ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らば、と定めなき願みの末をかけ、その日漸く早加といふ宿にだどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれるもの先づ苦しむ。只、身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴かた、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたく、路次の煩ひとなるこそわりなけれ。」

『奥の細道』

牛込の下宿で捨吉はこの芭蕉の文章を開けた。昔の人の書き遺したものを讀んで見て自分の若い心を勵まさうとした。

夢を出して讀みつゞけた。讀めば讀むほど、捨吉は精神の勇氣をそゝぎ入れらるゝやうに感じた。彼は波のやうに騰り騒ぐ自分の胸を押へて、勝子を見るにも堪へられなくなつて來た。それほどまで彼が沈默を守りつゞけたのも、愛することを粗末にしたくないと考へたからで。のみならず、默つて行き默つて歸る教師としての勤めを一層苦しく不安にしたものは、どうやら彼が學問



の資本の盡きさうに成つて來たことであつた。不慣な彼は、あまりに熱心に生徒を教へ過ぎて、一年足らずの間に僅かな學問を皆な出しきつてしまつた。それ以上、教へる資本が無いかのやうに自分ながら危ぶまれて來た。有付いた職業も、それを投出すより外に仕方がないほど、教師としても行塞つた。

捨吉の二十一といふ歳も二週間ばかりのうちに盡きやうとする頃であつた。麹町の學校でも第二學期を終りかけて居た。彼はある悲しい決心を摑んだ。

「古人も多く旅に死せるあり。」

とその『奥の細道』の中にある文句を繰返した。

丁度、岡見兄弟と市川とは、それまで出して居た小さな雜誌を大きくしやうといふ計畫を立てゝ居た。青春の血潮は互ひに性質の異なつた青年を結び着けて、共同の仕事のもとに集まらせやう

として居た。青木も、捨吉も、その仲間に加はらうとして居た。年若ながらに兄等の仕事に同情のある涼子をはじめ、磯子、勝子、それから麹町の學校の卒業生で岡見や涼子等の間によく噂の出る西京の峰子なぞの人達を背景に有つことが、一層この勢を促した。丁度來る年の正月には同人の新しい雜誌も出來やうといふところであつた。その中で、遽かに捨吉は旅を思立つた。捨吉は田邊の小父さんをはじめ、お婆さん、姉さん等の恩人のことも忘れ、大川端の兄のことも忘れ、遠く鄉里の方に彼のために朝夕の無事を祈つて居るお母さんのことも忘れてしまつた。彼は一切を破つて出て行く氣になつた。

麹町の學校の方の仕事は妻子のある青木のために殘して行かう。青木も骨が折れさうだ。左樣思つて捨吉は芝の公園へ訪ねて行つた。この捨吉のこゝろざしを青木は快く受けいれたばかりでなく、自分にもし妻子が無かつたら一緒に旅に上つたであらう。飄遊はわが天性であるといふほどの語氣で捨吉を慰めて呉れた。行く〳〵は青木のやうな友達の敎へ子として、勝子のことを考へるのも、せめてもの捨吉の心やりであつた。



青木を訪ねたついでに捨吉は築地の菅の家へそれとなく別離を告げに寄つた。相變らず菅は靜かな、平な心持で、ある西洋人の仕事の手傳ひなぞをしながら、獨りでコツ〳〵勉強を續けて居た。檢定試驗に及第して伊豫の方のある私立學校の敎師として赴任して行つた足立の噂も出た。

『菅君、しばらく僕は旅をして來るかも知れない。』

と捨吉は何氣なく言つて、この舊友にも青木等と一緒に同人の雜誌の仲間入をすることを勸めた。何等の嬉しいも悲しいもまだ知らず顏な舊友の話は、酷く捨吉には物足らなかつた。

麹町の學校へも捨吉は最終の授業の日を送りに行つた。彼は平素とすこしも變つた容子の無い勝子を同じ組の他の生徒の間に見た。十二月の末らしい日の光は、二階の敎場の窓硝子を通して、黒板の上まで射して來て居た。彼は新しい白墨の一つを取り、その黒板に心覺えの詩の句を書きつけ、それに寄せて生徒に別離を告げた。若くて貧しい捨吉は何一つ自分の思慕のしるしとして勝子に殘して行くやうな物をも有たなかつた。僅かに、その年齡まで護りつゞけて來た幼い『童貞』を除いては。

涙一滴流れなかつた。それほど捨吉は張りつめた心で勝子から離れて來た。牛込の下宿に歸ると彼は麹町の教會の執事に宛て、退會の屆を認めた。

御屆

私儀感ずるところ有之、今回教會員としての籍を退きたく、何卒御除名下されたく候。

と書いた。切ない戀のためには彼は教會をさへ捨てゝ出て行く氣に成つた。

ぶらりと捨吉は恩人の家の方へ歸つて行つた。麹町の學校を辭すると間もなく、牛込の下宿も疊んで、冬休みらしい顏付で僅かの荷物と書籍とを田邊の門の内へ運んだ。自分の爲たこと、考へることに就いては、何事も目上の人達に明さうとはしなかつた。

「兄さん。」

と大きくなつた弘が捨吉を見つけて飛んで來た。何時見ても人懷こいのは弘だつた。捨吉は何とも言つて見やうのないやうな心持で、すがりつく弘の身を堅く抱締めた。



もう一度捨吉は小父さんの家の玄關に、よく取次に出ては御辭儀をして奥の方へ客の名前を通したりその人の下駄を直したりした玄關に、片隅に本箱を並べて置いてそこを自分の小さな天地とした玄關に、悄然と歸つて來た自分を見つけた。果敢ない少年の夢が破れて行つた日から、この世の中は彼に取つて全く暗く味氣なくなつてしまひ、あの田邊の小父さんが沈んだ彼の心を引立たせやうとして面白さうな芝居に誘つて呉れやうと、あの姉さんが彼の好きさうな繪柄を見立てて奈樣な着物を造つて呉れやうと、何一つ樂しいと思つたこともなく、寂しい〳〵月日を獨りでこつ〳〵辿つて來たやうな彼も、今こそ若い日の幸福を——長い間、自分の心に求めて居たものを見つけたやうに思つて來た。その寂しい月日が長かつただけ、心を苦めることが多かつただけ、それだけ胸に滿ちる歡喜も大きなものゝやうに思つて來た。

しかし、捨吉がその歡喜を感じ得る頃は、やがて何等の目的もない旅に上らうとして居る時であつた。青木も心配して、菅と連立つて、田邊の家に捨吉を見に來た。

間もなく新しい正月が來た。町々を飾る青い竹の葉が風に萎びてガサ〳〵音のするやうな日の午後に、捨吉は勝手口の横手にある井戸の側を廻つて物置から草箒と塵取とを持つて來た。表門のくゞり戸を開けて、田邊とした表札の横に、海老、橙、裏白、ゆづり葉などで飾つた大きな輪飾りの見える門の前を先づ掃き清めた。樂しさうな追羽子の音は右からも左からも聞えて來て居た。捨吉は門の内にある格子戸の前の敷石の上を掃いた。それから庭の方へ通ふ木戸を開けて、手にした箒を茶の間の横の乙女椿の側へも持つて行き、築山風な楓の樹の間へも持つて行き、すつかり葉が落ちて幹肌のあらはな梧桐の根元のところへも持つて行つた。横濱の店の繁昌と共に、東京の方で留守居するお婆さんや姉さんの許へは樂しさうな正月が來て居た。捨吉はそのお婆さん達の居る奥座敷の前から、飛石に添ふて古い小さな井戸のある方までも掃いて行つた。冷たい冷たい汗が彼の額を流れて來た。

本二册、それに僅かな着更への衣類を風呂敷包にして、捨吉は夕方の燈火の點く頃に獨つて愚人の家を出た。



夕闇にまぎれて捨吉は久松橋を渡つた。人形町の通りを傳馬町まで歩いて行つて、岡見の店の横手にある木戸の前へ行つて立つた。

清之助——岡見の弟は、庭下駄を穿いて出て來て自分で木戸を開けて呉れた。清之助は例の茶の間で捨吉を待つて居て呉れた。

『兄は鎌倉の方で君をお待ちすると言つて、今日出掛けて行きました。妹も一緒に。』

と清之助は捨吉を迎へ入れて言つた。

茶の間の中央にある四角な爐の周圍は、連中が——左樣だ、最早連中と呼んでも可いほど親しくなつた若いもの同志が互ひに集つては詩文を語る中心の場所のやうに成つて居た。そこでは同人の雜誌も編輯された。その爐邊で、差向ひに火を眺めて、互ひに掌をあぶりながら語り合ふほど、捨吉は清之助の靜かな性質を知るやうに成つた。

『清さん、お客さまに進げて下さいな。』

と障子越しに來て呼ぶ清之助のお母さんの優しい聲がした。お母さんは障子の影で、いろ〳〵と女中の差圖をして行くらしかつた。やがてポツ〳〵食べながら話しの出來るやうな馳走が出た。

『何と言つても、自分等の雜誌は可愛い。』

清之助は捨吉を前に置いて、實にゆつくり〳〵食べながら話した。

寂しい雲の降出す音がして來た。傳馬町あたりの町の中とも思はれないほど靜かな茶の間で、捨吉はしと〳〵庭の外へ來る雲の音を聞きながら、別離の晩らしい時を送つた。十二時打ち、一時打つても、まだ話が盡きなかつた。

その晩は捨吉は傳馬町に泊つた。急激に轉下して行くやうな彼の若い生涯は、假令十年の友にも勝るほどの親しみはあつても何と言つてもまだ變りの日の淺い清之助と枕を並べて、この茶の間の天井の下に一緒に寢ることを不思議にさへ感じさせた。床に就いてからも、清之助は直ぐ捨吉を眠らせなかつた。



『今夜は是非、君に聞いて置きたい……そりや、まあ言はなくたつて解つてるやうなものだがね、まだ君の口から意中の人を指して話して貰はない。是非、それを聞かせて貰ひたい……その人の名前を今夜確めて置きたい……もし又、後になつて人が違つてた、なんてことに成ると困るからね……』

こんなことを言つて、清之助は夜の二時過ぎまでも捨吉を唸らせた。

眼に見ることの出來ない大きな力にでも押出されるやうにして、捨吉は東京から離れて行つた。傳馬町に泊つた翌日は新橋から汽車で、車窓の硝子に映る芝濱の裏手、東禪寺の上の方から一帶に續く高臺、思出の多い高輪の地勢が品川の方へ落ちて居るあの大都會の一角を一番しまひに眺めて通つて行つた。

捨吉は鎌倉にある岡見の別莊まで動いた。そこは八幡宮に近い町の裏手にあたつて、平坦な耕地

に圍繞かれたやうな位置にある。あの正宗屋敷といふ方にあつた農家から、捨吉はよく田圃の道づたひに岡見を見に來た一夏の間を思出すことが出來た。あの稻の葉の茂つた田圃の間から起る蛙の聲を思出すことが出來た。あの青い瓢箪の生り下つた隱者の住居のやうな門を叩くと、岡見がよく蒼ざめた顏付をして自分を迎へて呉れたことを思出すことが出來た。すべては捨吉にとつてまた昨日のことのやうな氣がして居た。

丁度岡見も學校の休暇の時で、その「隱れ家」に捨吉の來るのを待受けて居て呉れた。東京から見るといくらか暖い部屋の空氣の中で、捨吉は岡見や涼子と一緒に成ることが出來た。

「お涼さん、あのお預りしたものを岸本さんに進げたら可いでせう。」

と岡見に云はれて、涼子はそこへ仕立卸しの綿入羽織を持つて來た。

「これは高等科の生徒一同から君への御餞別ださうです。」「岸本先生の熱心は、一同の感謝するところでございます」と言つて、丁寧な言葉まで添へてありました。これは東京の方で君に進げるよりか、旅にお出掛になる時に進げたいなんて、妹がわざ〳〵鎌倉までお預りして來ました。」



と岡見が言つた。

思ひがけない麹町の學校の生徒からの贈物を鎌倉で受取ることは、旅に出掛ける矢先だけに餘計に捨吉を悦ばせた。岡見は捨吉のために、さしあたりの路用の金を用意して置いて呉れたばかりでなく、西京には涼子等が姉のやうに賴む峯子が居る。旅のついでに訪ねて行け、不自由なことがあつたら賴め、と言つて西京宛の手紙までも用意して置いて呉れた。知己のなさけは捨吉の身にしみた。彼はそれを痛切に感じ始めたほど、身は既に漂泊のさかひにあることを感じた。

「お峰さんの許へは私からも手紙を出して置きませう。」

と涼子が兄さんの方を見て優しく言葉を添へた。

「お峰さんか。まあ、お逢ひになれば解りますが、こいつが又たなか〳〵の拗ね者なんです。」

斯の岡見の調子は捨吉を微笑ませた。いくらか物を大袈裟に言ふのが岡見の癖であつたから。

「お涼さん、お前さんのお餞別も序にこゝへ出しちやつたら可いでせう。」と岡見は兄さんらしく言つて、やがて捨吉の方を見て、「岸本さんに進げたいと言つて、妹は袋を一つ縫ひました。」

岡見の側で見るにふさはしい涼子は、清之助よりも寧ろこの年長の兄さんの方に合ふらしかつた。彼女は捨吉のために見立てた茶色の切地で縫つたといふ旅行用の袋を取出して來て、それを岡見の前に置いた。時々岡見の爆發するやうな笑聲が起ると、彼女はそれを樂しさうにして聞くばかりでなく、岡見と捨吉の間に出る同人の雜誌の話、連中の噂なぞにも熱心に耳を傾けた。磯子に對する岡見の遠慮ない心持にも姉妹中で一番同情を寄せて居るのは彼女らしかつた。

『青木君の結婚の話が好いぢやないか。先生はあの細君を擔ぎ出しちやつたと言ふんだから。』

『青木君のは自由結婚ださうですね。』

岡見と捨吉とが語り合ふ傍で、涼子はかすかな深い微笑を見せて居た。

二汽車ばかり後れて清之助も東京から捨吉の後を追つて來た。高等學校の制服でやつて來た清之助を加へたので、狹い別莊の內は一層賑かになつた。

『一寸失敬します。そこいらへ行つて草鞋を見つけて來ます。』と、捨吉が言出した。

『今、婆やに取りにやりますよ。』と涼子は立つて來て言つた。



『兎に角、今夜はこゝへお泊りなさい。弟もその積りで來たんですからね。草鞋は明日の朝までに買はして置きませう。』と岡見も捨吉をいたはるやうな調子で。

『あんまり御世話になつて、御氣の毒だ。』と捨吉が言つた。

『なあに、そんなこと有りやしない。まあ、今夜は大いに話すさ。しばらくもう御別れだ。』

夕飯には涼子の手料理で、心づくしの馳走があつた。捨吉はこれから先の旅の話をして、西京へ行つたら未だ逢つたことない峰子をも訪ねやうし、ことによつたら伊豫の方へも旅して、そこに教鞭を執つて居る足立をも訪ねやう、兎に角これから東海道を下つて行つて見るつもりだと話した。涼子もそこへ來て、夜の燈影に映る二人の兄さん達の顏と旅に行く捨吉の顏とを見比べて居た。

そこいらがシーンとして來た頃、岡見は先づ疊の上に跪いて、

『岸本君のために祈りませう。』

と言出した。清之助も、涼子も、捨吉も、皆なそこへ跪いた。激情に富んだ岡見は熱い別離の

祈りを神にさゝげた。

『主よ。すべてをしろし召す主よ。大なる幸福に先だつて大なる艱難と苦痛とを與へたまふ主よ。われ〳〵が今送らうとして居る一人の若い友達の前途は、唯あなたがあつてそれを知るのみでございます。』

こんな風に祈つた。清之助もまた靜肅な調子で、捨吉のために前途の無事を祈つて呉れた。

翌朝早くから捨吉は旅の仕度を始めた。小竹の家を出る時に着て來た羽織を脫いで、麹町の學校の生徒が贈つて呉れたといふ綿入羽織に着替へた。腰には用意して來た脚絆を宛てた。脫いだ羽織、僅かの着替へ、本二册、紙、筆なぞは、涼子から贈られた袋と共に一纏めにして、肩に掛けても持つて行かれるほどの風呂敷包とした。岡見兄弟と一緒の朝茶も、着物の下に脚絆を宛てたまゝで飮んだ。



前途の不安は年の若い捨吉の胸に迫つて來た。『お前は氣でも狂つたのか』と他に言はれても彼はそれを拒むことの出來ないやうな氣がして居た。その心から、岡見にたづねて見た。

『僕の足を浮ついて居るやうに見えませうか。』

『どうして、そんな風には少しも見えない。奈何なる場合でも君は靜かだ。極く靜かに君はこの世の中を歩いて行くやうな人だ。』

この岡見の言葉に、捨吉はいくらか心を安んじた。

禮を述べ、別れを告げ、やがて捨吉は東京から穿いて來た下駄を脫ぎ捨てゝ、上り框のところで草鞋穿きに成つた。

『いよ〳〵お出掛でございますか。』

と婆やもそこへ來て言つた。

自分ながら何となく旅人らしい心持が捨吉の胸に浮んで來た。草鞋で砂まじりの土を踏んで、岡見の別莊を離れやうとした。その時、岡見は捨吉に隨いて一緒に木戸の外へ出た。

『ぢや、まあ御機嫌よう。お勝さんの方へは妹から君のことを通じさせることにして置きました。』

と岡見が言つた。

この餞別の言葉は捨吉に取つて、奈何なる物を贈られるよりも嬉しかつた。實に、一切を捨てゝ来、初めて捨吉はそんな嬉しい言葉を聞く事が出来た。それを聞けば、もう澤山だ、とさへ思つた。

清之助も、涼子も、岡見と一緒に、朝日のあたつた道に添ふて捨吉の後を追つて来た。途中で捨吉が振返つて見た時は、まだ兄妹は枯々とした田圃側に立つて見送つて居て呉れた。

裏道づたひに捨吉は平坦な街道へ出た。そこはもう東海道だ。旅はこれからだ。左様思つて、彼は雀躍して出掛けた。

一里ばかり半分夢中で歩いて行つた。そのうちに、獣つて出て来た恩人の家の方のことが激しく捨吉の胸中を往來し始めた。狂人じみた自分の行爲は奈何に田邊の小父さんや、姉さんや、それ



からあのお婆さんを驚かし、且つ怒らせたであらうと想像した。大川端の兄の驚きと怒りと悲みとをも想像した。その考へから、捨吉は言ひあらはしがたい恐怖にすら襲はれた。彼は日頃愛讀する書籍から、衣類、器物まで、貧しい身に貯へた一切のものを恩人の家に殘して置いて来た。どうかして斯の自分の家出が、單なる忘恩の行爲でなしに、父母から負き去り暴棄の衣に身をやつしても一向道を急ぐあの憐むべき發心者のやうに見られたいと願つた。

海に近いことを思はせるやうな古い街道の松並木が行く先にあつた。捨吉は路傍にある石の一つに腰掛けて休んだ。そして周圍を見廻した。眼前には、唯一筋の道路と、正月らしく映つて来て居る日の光とがあるばかりであつた。彼は恩人からも、身内のものからも、友達からも、自分の職業からも離れて来た。その時は全く自分獨りの旅のすがたを見つけた。日頃親しい人達は誰一人傍に居なかつた。彼は石に腰掛け乍ら、肩から卸した風呂敷包をその石の側に置いて、熱い涙を流した。

捨吉は東海道を下つて行つた。斯うして始まつた流浪が進んで行つたら終には奈何なるかといふ

やうなことは全く彼には考へられなかつた。鎌倉から興津あたりまで歩いて行つた。舊暦で正月を迎へやうとする村々を通過ぎた時は、途中で復た煤掃の音を聞いた。一日一日と捨吉は温暖い東海道の日あたりの中へ出て行つた。どうかするとその日あたりの中に咲く名も知らない花を見つけて、せめて路傍の草花から旅人と呼ばるゝことを樂んだ。

誰か後方から追ひかけて來るものがある。逃れ行く自分を捉へに來るものがある。この恐怖、東京の方の空を振返る度に襲つて來るこの恐怖は、僅計に捨吉の足を急がせた。小高い眺望の好い位地にある寺院の境内が、遠く光る青い海が、石垣の下に見える街道風の人家の屋根が、彼の眼に映つた。興津の清見寺だ。そこには古い本堂の横手に、丁度人體をこゝろもち小さくした程の大きさを見せた青苔の蒸した五百羅漢の石像があつた。起つたり坐つたりして居る人の形は生きて物言ふごとくにも見える。誰かしら知つた人に逢へるといふその無數な彫刻の相貌を見乍ら行くと、あそこに青木が居た、岡見が居た、清之助が居た、こゝに市川が居た、皆も居た、と數へることが出來た。連中はすつかりその石像の中に居たっ捨吉は立ち去りがたい思をして、旅の風呂敷



包の中から紙と鉛筆とを取出し、頭の骨が高く尖つて口を開いて哄笑して居るやうなもの、廣い額と隆い鼻とを見せながらこの世の中を睨んで居るやうなもの、頭のかたちは圓く眼は瞑り口唇は堅く噛みしめて齒を喰ひしばつて居るやうなもの、都合五つの心像を寫し取つた。五百もある古い羅漢の中には、女性の相貌を偲ばせるやうなものもあつた。磯子、涼子、それから勝子の面影をすら見つけた。斯うして作つた簡單な見取圖は旅での手紙と一緒にして傳馬町宛に送らうとも考へた。毎日々々動いて居る彼は東京の友達からの消息に接することも出來なかつた。

復た捨吉は旅を續けた。ところ〴〵汽車にも乘つて、熱田の町まで行つた。熱田から便船で四日市へ渡り、鈴山といふ所にも一晩泊り、それから添い寂しい山路を歩いて伊賀近江の國境を越した。

黒ずんだ琵琶湖の水が捨吉の眼前に展けて來た。大津の町に入つた時は、寺々の勤行の鐘が湖水に響き傳はつて來るやうな夕方であつた。風の持つて來る溶けやすい雪は、彼の頬にも、彼の足許にも、荷物を掛けた彼の肩にも來た。そこまで行くと、西京も最早遠くはないといふ氣がした。

何等かの東京の方の消息も聞けるかと、それを樂みにして、圖見から紹介された峰子といふ人を西京に訪ねて見やうと思つて居た。

「まだ自分は踏出したばかりだ。」

と彼は自分に言つて見て、白い綿のやうなやつがしきりに降つて來る中を、あちこちと宿屋を探し廻つた。足袋も、草鞋も濡れた。まだ若いさかりの彼の足は踏んで行く春の雪のために燃えた。

（終）

小說「樓の實の熟する時」
（實價金壹圓拾錢）

大正七年十二月廿九日印刷
大正八年一月一日發行

著作者　島崎春樹　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　和田利彦
印刷者　金綱彌　東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八番地

著作者檢印

發行所　春陽堂　東京市日本橋區通四丁目五番地（電話本局五一一番）（振替口座東京一六一七）